

氏名・(本籍)	すぎ やま れい こ (秋田県) 杉 山 令 子
専攻分野の名称	博士(保健学)
学位記番号	医博甲第36号
学位授与の日付	令和4年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科専攻	医学系研究科(保健学専攻)
学位論文題名	独居高齢進行がん患者の外来がん化学療法中の暮らし
論文審査委員	(主査) 教授 中村 順子 (副査) 教授 佐々木 真紀子 准教授 眞 壁 幸子

論文内容の要旨

研究目的

独居高齢進行がん患者の外来がん化学療法中の暮らしを明らかにする。

対象・方法

研究デザインは、質的記述的研究とした。暮らしとは、治療を受けながら、日々を過ごす上で生じる、感情や考え、身体や社会的な影響とその対処、他者との交流などの全ての体験と定義し、インタビューガイドを作成、データ分析した。

研究参加者は、65歳以上で独居の進行がん、外来がん化学療法中(補助療法・治癒目的・治験を除く、経口薬含む)の患者とし、インタビューガイドに沿って半構造的面接を行った。逐語録を切片化、コード化して類似性に基づき継続比較分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。カテゴリー間の関係性を検討し、中核カテゴリー、ストーリーラインを導出した。

結果

1. 参加者の概要

参加者は12名、平均年齢74歳であった。男性7名、婚姻歴有8名、独居期間3か月～50年間、家族介護者なし4名、手術経験有9名、外来治療期間1～40カ月間であり、Performance Status 0～1の者が7名であった。面接時間は平均44分であった。

2. 結果

9 カテゴリー【 】, 49サブカテゴリー〈 〉が抽出された。ストーリーラインを以下に示す。

彼らは常に【高齢と独居ゆえのゆとりと心細さがある】状況でありながら、【人に迷惑をかけない矜持と共に生きている】ことを信念として過ごしていた。そのため緊急時などに迷惑をかけないように【いざという時のために備える】ようにしていた。がんの進行は心に重くのしかかり、病の脅威や症状の辛さや不安、やりたいことができなくなることで落ち込み【心は絶望側に傾斜している】状況であった。しかし、長い人生を歩み困難を乗り越えてきた彼らだからこそその経験が心を整える力となり、揺れ動きながらも、がんと同居するのは運命だから【仕方ないとこれまでの日常を続けることで心が前を向く】状況となり、さらに意識的・無意識に自分を支え導く力が内から湧き【最期を生きていくための内なる力に動かされる】ようになっていた。彼らは、先は長くはないことを認識しながらも、それぞれの「生きるため」に後悔しない治療を求め、治療の内容も辞め時もお任せする【自分に最適な医療を施してくれるとその医師を信じ「生きるため」の治療を委ねる】意志を持っていた。彼らの日常は〈生活を回せるかは、がん・副作用の症状が落ち着いていて動けるかどうかをものいう〉など【身体状況と得られるヒト・モノ・カネによって生活の辛苦の程度が一変する】状況で、〈加齢と治療による衰弱や体調の変化を感じながら過ごす〉日々である。それでもできる限り人に迷惑をかけずに自立したいという信念を貫き、彼らの暮らしは【あと少し命を永らえ人生を全うするために脆くなりゆく「私の器」の中で我慢とやりくりして過ごす】ものであった。中核カテゴリーは【あと少し命を永らえ人生を全うするために脆くなりゆく「私の器」の中で我慢とやりくりして過ごす】であった。

考 察

1. より安全で質の高い在宅療養生活のために

彼らの暮らしは【あと少し命を永らえ人生を全うするために脆くなりゆく「私の器」の中で我慢とやりくりして過ごす】ものだった。それは高齢独居で進行がんでも、「人に迷惑をかけない」「自立」の矜持を抱いて信念とし、独立¹⁾した人生を全うするため、命と引き換えに、活動の範疇である「器」の中で、絶望側に傾きながらも我慢とやりくりをして過ごすものであった。そこには長い人生を歩み困難を乗り越えた彼らだからこそその経験や知恵、心を整える力があり、信念を貫き生きようとする営みがあった。従って彼らの支援には信念を尊重し、まずは器「身体・精神状況、知恵や経験知、価値観、能力、許容範囲、得られる人・物・経済的資源でつくられる、その者のゆとりを含んだ活動範囲」の強化が重要となることが示唆された。支援は、器の弱みの支援のみならず、強みを活かし自己肯定感や自己効力感を高める姿勢が、弱い要素を補完し器全体の強化に効果的であると考えられた。それは多要素から成る生活に、自身の価値観で折り合いをつけられるよう、指導ではなく情報提供や提案、助言する姿勢である。

一方、彼らは今後衰弱し、器は脆く自立が困難となっていくのも事実である。従って「自立」の支援には備えが肝心であり、先々を計画し支援を選び利用する「自律」へ移行していけるよう、【いざという時のために備える】など早めの今後の準備や、ACP（アドバンスケアプランニング）が必要と考察された。

また彼らは命と引き換えに症状・スピリチュアルペイン、暮らしを「我慢」し、「苦痛をあまり訴えない」特徴があった。緩和ケアは、治療と共に早期から行うことが望まれる。彼らには安全な治療と共に、寄り添って苦痛に気づき緩和ケアを積極的に行う必要があることが示唆された。そして今は治療中だからと、人生を一時停止したように暮らしを我慢してしまう者がいるが、彼らの病期にQOL維持は重要である。生きる力にもつながる自分らしい日常を続ける関わりが大切である。そしてACPにより育まれる人生のコントロール感覚は、譲れない部分を認識し過度な我慢を防ぎ、QOL向上に役立つと考える。

2. 治療決定支援のために

医師に治療をお任せする特徴があった。高齢者は自己表明や自己決定が難しく、信頼する者に託し甘えることで安心感を得る心情があり、信頼する医師に治療を委ねたい意思²⁾への理解が必要である。しかし治療はQODにかかわる。患者との認識のずれによる過少・過剰な治療、先を見通せず最期の準備が間に合わないことにもつながりかねない。また治療は生きる希望であり、治療終了により希望を失ったり、施設の変更を余儀なくされ「見捨てられ感」が生じたりする懸念もある。今後、認知機能低下や急変により意思決定が益々困難となる心配もある。従ってやはり主体性を育むACPは重要であり、その検討や治療決定の場において、人生で大切にしたいことや意向を汲み取る努力、伝える支援、時には質問を促し、代弁することが看護師の大切な役割であると考えている。

3. 彼らの看護を外来で行うこと・地域医療に関する課題

彼らには多くのケアが必要であったが、煩雑な外来看護の場で全てを行うことは、現実的に難しいことが課題である。看護部は組織的に外来部門の充実を図る人員配置を行い、特にがん看護専門看護師や認定看護師、緩和ケアチームの力が生かされることが期待される。また訪問看護は寄り添う看護に適するため、活用されることが望ましい。外来看護、訪問看護、地域包括支援センターなど地域住民を支える施設が連携、役割分担をして、限りある人員や財源を考慮した経済的・効率的なケアが行われることが望まれた。

さらに高齢化社会にあることから、彼らを医療・介護サービスと公的支援だけで支えることは、仕事量的にも機能的にも難しい。患者会や暮らしの保健室などのインフォーマルな支援を含めた包括的な支援が不可欠であると察せられた。しかし彼らは交流を自ら求めず、信頼する人の後押しがなければ利用に結びつかないだろう。地域で暮らす患者の支援において、医療・介護・公的支援は、それらインフォーマルな支援とも連携して、個人に適した支援が活用できるように相互紹介、情報共有など、協働することが望まれる。

以上のように彼らには、外来看護の充実、施設間の連携、インフォーマルな支援活動は不可欠であ

る。これらの活動が促進され、現実的に持続可能なものにするには、看護師の努力と犠牲のみでは成立しない。連携の仕組みの確立、必要人員配置につながる診療報酬の改定、活動団体への資金補助が実現できるよう、政策に組み込まれることが必要であると考えられた。

結 論

彼らの暮らしは、【あと少し命を永らえ人生を全うするために脆くなりゆく「私の器」の中で我慢とやりくりして過ごす】ものであった。

引 用 文 献

1. Siri Andreassen, et al: Meanings of being old, living on one's own and suffering from incurable cancer in rural Norway. Eur J Oncol Nurs 17 (6), 781-787, 2013
2. 杉山令子, 他: 外来がん化学療法における携帯型ディスポーザブル注入ポンプを使用する患者の体験. 秋田大院医研科保健紀 27(1) 63-71, 2019

論文審査結果の要旨

要旨:本研究は独居高齢進行がん患者の外来化学療法中の暮らしを,12名の研究参加者にインタビューをして質的記述的研究法を用いて明らかにしたものである。その結果【あと少し命を永らえ人生を全うするために脆くなりゆく「私の器」の中で我慢とやりくりして過ごす】という中核カテゴリー他8カテゴリー,49サブカテゴリーを導出した。結果から,より安全で質の高い在宅療養生活を支えるための対象の深い理解と看護職の看護の姿勢に対する考察が得られた。更に主体性を育むACPの重要性,地域における包括的支援の在り方まで幅広い考察と提言を行った。

斬新さ:独居高齢者の特徴,進行がん化学療法中の患者の特徴などは明らかにされているものの,今回の対象である独居高齢進行がん患者の外来における化学療法中の暮らしを明らかにしたのは初めてである。新しい知見として新規性に富んでいる。

重要性:平均寿命が延び,がん治療も高度化する中で,このような患者に対する支援は欠かせず,またそのための深い対象理解となった本研究は,がん看護のみならず,地域における包括的ケア体制の構築の上でも欠かせない資料となった。非常に重要かつ意義深い研究と言える。

研究方法の正確性:リサーチクエストを基にした研究デザインの決定,データ収集と分析など質的研究のプロトコルに則って行われた。真実性(妥当性)の確保についての検証も十分に行われている。

表現の明瞭性：論旨は一貫しており，文章は簡潔明瞭，非常に論理的な文章構成となっている。科学論文でありながら読者をその世界に引き込む，物語性を備えた稀にみる優れた論文となっている。以上より本論文は博士の学位に相応しいと判断した。

